

SOWER

ソア=種まく人

No.14

June 1999

財団法人

日本聖書協会

特集 聖書を通読する



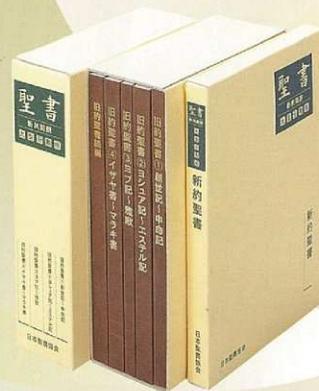
2000年には聖書全巻通読を。

1999年6月1日発売!

読みやすさと
携帯性の良さが
ドッキング!



書名
新共同訳 大型分割版聖書
サイズ A4判 装丁 軟表紙 ケース入り
旧約聖書(4分割) 本体価格 12,000円
旧約聖書・旧約続編つき(5分割)
本体価格15,000円
新約聖書 本体価格 3,000円



書名
新共同訳 分割版聖書
サイズ A5判
装丁 軟表紙 ケース入り
聖書(5分割) 本体価格 7,000円
聖書・旧約続編つき(6分割)
本体価格 8,400円

日本初!

旧新約聖書の和英対照

和文/
新共同訳
英文/
Today's English Version
第2版 (Good News Bible)

書名
中型和英対照聖書
サイズ
B6判
装丁
ビニールクロス装
軟表紙
ジャケット掛け
本体価格
4,500円



大好評発売中

●ご注文は最近のキリスト教専門書店、または全国の書店へ
(郵送の場合ご注文額に送料、別途送料がかかります)
●カタログ請求、お問い合わせは下記まで
〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3567-1987 (ダイヤルイン)
FAX 03-3567-4436
ホームページ <http://www.bible.or.jp>
財団法人日本聖書協会

聖書のある生活 新共同訳聖書(抜粋) 新書判 40ページ

あなたに贈るちいさな聖書

- 愛**
結婚する二人に贈る聖書の言葉
選/三浦綾子 絵/栗 祥明
- 病に生きる**
病む人、その家族と友人のための
聖書の言葉
選/日野原重明 絵/嶋崎 恵
- 誠実**
ビジネス界を翔る人の
聖書の言葉
選/速水 俊 写真/横山 匡
- なぐさめ**
自分の弱さを知る時の聖書の言葉
選/曾野綾子 絵/三牧和子
- 信**
日本人の心に語りかける聖書の言葉
選/木田弘彦 写真/森本 二太郎



聖書から贈る言葉
全7巻セット 美装ケース入り
本体価格3,500円

- 希望**
輝く十代から贈る聖書の言葉
選/ライラック会 写真/矢島信一
- 隣人**
人との関わりを喜びとする聖書の言葉
選/濱尾文部 写真/松浦忠孝

各本体価格500円(愛のみ本体価格476円;重版から本体価格500円に改定)

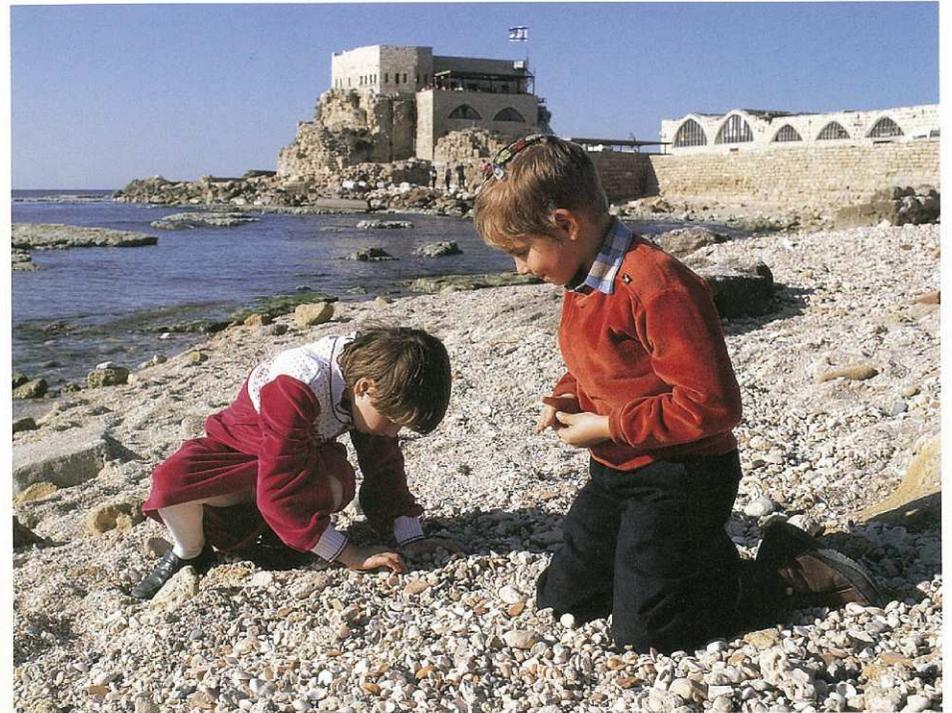
SOWER
ソア No.14

1999年6月1日発行
[年2回6月・12月発行]

発行・財団法人日本聖書協会
〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3567-1980 振替 00160-2-18410

ホームページ
<http://www.bible.or.jp>

この雑誌は
エコマーク認定の
再生紙を
使用しています



港町カイサリア

カイサリアはヘロデ大王によって、紀元前二二年から十二年間かけて建造された港町です。それから五百年間ローマの総督府がここに置かれ、「小ローマ」と呼ばれる大都会となります。

一二六五年、十字軍の要塞が破壊されて以来、この町は衰退し現在は廃墟となっています。

神を畏れるコルネリウスというローマ軍百人隊長が幻に導かれて、ヤッファにいたペトロをカイサリアに招き、初めて異邦人に聖霊が注がれました。

パウロは二年間ここに幽閉された後この港からローマに護送されてゆきました。(使徒言行録一〇章、二七章)

現在のカイサリアは、イスラエルで唯一ゴルフ場があり、美しい別荘が立ち並びリゾート地として整備されています。発掘された円形劇場は整備されています。最近、この劇場から十字軍遺跡にかけての海岸線が大規模に発掘されつつあり、たくさんさんのモザイク床などが見つかっています。

【写真】港を眼下に十字軍時代の遺跡。現在はレストランに利用。

巻 頭 聖 句

苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む

(ローマの信徒への手紙 5章3・4節)

人生苦難多しという。人としてこの世に生をうけ、生き生かされていま在るを静思するとき、生老病死、天地激変、人生八十年といわれる今日でも決して平坦なものではない。肉親、知友に別れるあり、事業崩壊、失職して路頭に迷うあり、また戦争や天災事変に遭遇して、すべてが灰燼に帰することもあるのが世の常である。顧みれば、わたし自身の人生も苦難の多い人生の歩みであったと思う。奥丹後大地震で被災し、いっさいが灰になるとともに、母の重傷、幼弟三名の焼死、心痛苦悩の父の天逝などが相次ぎ、呆然自失した少年の日を思い起こす。しかし、その震災の焼け跡に、いち早く慰問、激励に来た賀川豊彦先生のイエスの友会の一団によって、わたしはキリスト教に導かれた。その後のわたしを励まし、望みと力を与えてくれたのは、標記の聖句である。思えば苦難は“涙に代えて歌を給う”神の愛の鞭といえるのではないか。

山崎宗太郎

全国朝教会会長

CONTENTS

Sower
No.14
1999

2 聖書を通読する
仲村 堪 / マルセル・ルドールズ
大庭昭博 / 山下萬里
尾崎マスコ / 小林和夫

9 Eメール 渡部 信

10 エッセー
篠原せつ 「文字を読む」

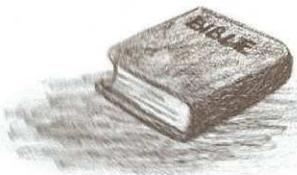
12 2000年を迎えて
岡田武夫

13 聖書図書館蔵書シリーズ
バグニヌス訳
「ラテン語聖書」

聖書を通読する

2000年には聖書全巻通読を

特集



「初めに、神は天地を創造された。」(創世記一・一) から始まり
「主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。」(ヨハネの黙示録二二・二一)の
最後の言葉で終わる聖書は、六十六巻一、一八九章(旧約聖書統編十三巻一七六章)で構成され、
およそ四百万字に及ぶ。この膨大な聖書の通読にひたすら取り組む人たち——日々みことばに
聴くそのひたむきな姿勢は、多くの人々の共感を呼ぶ。彼らはまさしく
「神の愛に出会う旅」の旅人たちである。

開近に二十一世紀を迎えるにあたり、さまざま
なイベントがさまざまな団体によって計画さ
れております。その中で本当に大切なものは何
かを私たちは見失いがちです。日本聖書協会では、「聖書通読運動」を諸教会、クリスチャン、
一般の方々に提唱していきたいと思っております。そ
して、「草は枯れ、花は散る。しかし、主の言
葉は永遠に変わることがない。」(新共同訳・ペ
トロの手紙一・二四―二五)のみ言葉のこ
とく、聖書の使信が私たちに与えて最も古いも
のにもかわらず、最も新しいメッセージとな
ることを願うものです。

今回の特集は、六名の方々にご登場をお願い
し、聖書通読についての考え方や、実際の取り
組みについて執筆していただきました。この日
毎の新しいメッセージを聖書通読という形で皆
様がどのように享受されているか、筆者も聖書
通読を長い間実践してきた者として、そこから
得る養いは大きいと言わざるをえません。この
特集が読者の皆様にご参考になればと思います。
さて、聖書をどう読むか、理解するか、古今
の神学書、解説書を読むときに、決まっていたど
りつく指標というものがありません。それは、
「神の靈感によって書かれた」ということです。

聖書はどうして聖書なのか、どうして聖書は神
の啓示の書なのか、聖書通読にはどういう意義
があるのか。これらの判断基準が聖書のみ言葉
自身に内包されていて、それは「神の靈感によ
って書かれた」という非常に抽象的な言い方に
もかわらず、それが即、私たちの魂に語りか
ける具体的な、現実的な出来事であることの証
左となっているのです。そのような意味で、こ
の聖書通読運動を、神様が用意してくださるす
ばらしい恵みの機会として、一人でも多くの方
がその体験を享受できますよう心からお祈りい
たします。
(総主事 渡部 信)

み言葉は日々の糧



仲村 堪
なかむら し のぶ

ウェスレアン・ホーリー
ネス教会連合定橋教会
会員。33年間勤務した
日本聖書協会を5年前に
退職し、昨年献堂した
定橋教会新会堂の建設
委員長として尽力する。

「わたしはみ言葉を与えられて、それを食べ
ました。み言葉は、わたしに喜びとなり、心の
楽しみとなりました。」(口語訳 エレミヤ書一
五・一六)

口語聖書時代からの愛唱聖句である。キリス
ト者として信仰生活を、喜びと感謝をもって一
貫して継続するため、牧師に勧められたことが
「聖書を読むこと」「祈ること」「礼拝等定期集
会を励むこと」であった。主の御恵みによつて、
昨年受洗六十周年を迎えた。

トマス・ア・ケンピスの「キリストに倣いて」
からも、聖書を読むべきことなど、勧めと多く
の証しを聞かされた。「聖書の中に求めるべき
ことは真理であつて、雄弁ではない。すべて聖

書はそれがつくられた精神で読むべきである。
聖書の中には、言葉の巧みさよりもむしろ魂の
益となるものを求めるべきである。単純で敬虔
な書物を高速で深遠な書物と同じように喜んで読
むべきである。博学であるにせよ、浅学である
にせよ、著者の権威に動かされず、ただ純粋な
真理への愛にひかれて読むべきである。誰がこ
れを語るかを問うことなく、何が語られるかに
心をとめなさい。」

教会では「愛の祈り」という月刊誌が発行さ
れて十五年になる。これに「教会聖書通読表」
と「アバ・ルーム」の引用聖書が掲載されてい
る。これによつて年一回の聖書通読と「アバ・
ルーム」による日毎のデポジションを勧めてい
る。わたしは日本聖書協会の「二年間聖書通読
日課表」に従つて三十年に及ぶ。ここ四年余は
交読し、家内が「二日一章」(榎本保郎著)を
朗読、わたしが「アバ・ルーム」を朗読する。
新共同訳の固有名詞は、なかなか読みづらいが
楽しみでもある。この聖書通読と祈りは早朝五
時から始め、六時半で終わらせる。

また教会では、主日は信徒育成クラスで聖書
を専ら学んでいる。わたし自身は「聖書愛読コ
ース」を単独で担当し、十六年間礼拝前に「一日一
章を輪読して学んできた。創世記からの聖書覚
え歌は大いに聖書愛読と結び付いたものである。
三十年前、名古屋在住の尾関誠一翁が信仰継
承のためにやってきたことを、朝拝会全国大会が
東京で開催されたとき、夜の伝道会で立証された。

尾関翁の聖書通読はごく当たり前のことであ

った。しかし確実に徹底して継続させた。それ
が力になった。その当時「アバ・ルーム」に掲
載された「平凡+信仰≠非凡」の見出しの一文
とともに感動し、激しく揺さぶられる思いであ
った。その後、伝え聞いたところによると、子
供七人、孫二十五人、ひ孫三十六人、計六十八
人に聖書を贈られた。「この書を信仰の遺産と
して贈る」と記して、一年かけて読み、赤線を
引いた。最高の遺産を贈られた。その赤線の引
かれた箇所がひとりひとり違つていたとのこと
であった。

尾関翁の立証に強く揺さぶられ、わたしの聖
書通読はこの時から新しくされた。尾関翁に倣
つて子どもや孫、甥姪など十冊まで進んだのが
この十年である。今年には自分に与えられた聖書
をもう一度初心にかえて通読に用いている。

文語聖書から口語聖書への移行はあまり苦に
ならなかったが、口語から新共同訳への移行に
は苦勞している。特に幾つかの暗唱聖句は、標
記のエレミヤ一五章一六節、またローマ八章二
八節はか、さらに受洗のときに与えられたみ言
葉は「学びて確信したる所に常に居れ」(テモ
テ後書三・一四)などは、どうしてもそのまま
口から飛び出してしまう。

だが、これからのために、「あなたの御言葉
が見いだされたとき/わたしはそれをむさぼり
食べました。/あなたの御言葉は、わたしのも
のとなり/わたしの心は喜び躍りました」。(新
共同訳・エレミヤ書一五・一六)

ああ、聖書、神のことばに感動、感動、感動である。

聖書100週間



マルセル・ルドルズ

パリ外国宣教会司祭。1952年に中国の政変で追放されて来日し、上野教会で32年間主任司祭として司牧。74年から「聖書100週間」を始め、現在は真生会館でその指導にあたる。

毎週参加するのが楽しみになります。イスラエルの民の歩調に合わせて、連続ドラマのように救いの歴史がどのように発展したかを通読していきます。そのため途中からの参加は困難です。

《毎週の集会》(約二時間)

- 1 復習として約三十分、先週の個所の大切なポイントを整理します。
- 2 自宅で読んだ聖書の感想を席順に述べて短い祈りをします。(一人三分)
- 3 感想に対しての質問や評価はしません。黙って耳を傾けて聴きます。

3 十分程の休憩後、予習として来週までに自宅で読んでくる個所の簡単な紹介があります。よく見るとこの方法は、あたかも三面の屏風を眺めるように、毎週聖書の三箇所を目を通しています。予習、感想、復習という形で、三週にわたって同じ箇所を三回ずつ目を通すことになり、こうして神から啓示された言葉は少しずつ巻物のように参加者の目の前に広げられていきます。

参加者は、毎週集まりで互いの感想と祈りによる実り豊かな収穫を積み重ねながら、約三年で通読を終了します。

「聖書100週間」の特徴は、学問的な研究ではないので、疑問点や細部に止まらずに、かなり速く進んでいきます。それでもたびたび繰り返されることや、強調されている大切な事柄なども分かり、全体の流れをつかむことができます。

司会者は会が円滑に進むように手伝いますが、講義はしません。すでに一度か二度、通読を経験した信者に司会を依頼しています。

参加者は聖書を読みながら、補助テキスト「聖書100週間」を手引きとして使います。このテキストには毎週読む個所の配分表があり、救いの歴史の発展を把握できるように各書の時代背景、著者の意図の簡単な紹介、重要なポイントや大切な教えがまとめてあります。

新しいグループがスタートするときには、先に説明会があります。真生会館では九月から始まり、全国で毎年二百人くらいが読み始めます。

二十五年前(一九七四年)の聖年を機に上野教会で始められたこの読み方は、すぐ北海道から沖縄までの幾つかの教会でも始められました。今ではテキストも韓国語、英語、中国語、タミール語、フランス語に翻訳され使われています。参加者は、信仰に目覚め、耳が開かれ、言葉が分かるようになり、素直に祈り、喜びに満たされて、積極的なキリスト者に変わり、新しくなった心で人を迎え入れるようになり、教会共同体も家庭も明るくなります。誰もが教派を超えて仲良く参加し、聖書の統編も一緒に読んでいます。ともかく、難しい、楽しい読み方です。ぜひ、試してみてください。

なお、お問い合わせは左記へ、はがきか手紙でお願いいたします。

〒160-0001 東京都新宿区信濃町33 真生会館「聖書100週間」

ギリシア語で聖書通読



大庭昭博

おおば あきひろ

青山学院大学助教授、宗教学主任。日本キリスト教団教師。著書に「現代の社会倫理と霊性」訳書にマルティン・ヘンゲル著「ゼーロータイ」がある。

神学校でせっかく習得した新約聖書のギリシア語、旧約聖書のヘブライ語は、牧師が説教や聖書研究の準備以外にどれだけ読んでいるかは個人差がある。日本の神学校よりも合格の基準はるかに厳しいドイツの牧師でも、特にヘブライ語は基本テキストから離れる傾向があると言われている。日本人の場合、聖書語学の習得が年齢的に遅いだけに、卒業後さびつづきの

も早いだろう。日常的な牧会に追われる忙しさの中で、聖書の言葉の源泉から離れないようにとドイツで編まれたのが、日・ビツァーによる「道の光」である。三六六日分のギリシア語とヘブライ語のペリコーペ(引用聖句)は、恣意的に選ばれたものではなく、基本的な単語と、

教会暦による聖句が意図的に組み込まれている。

かつてD・ボンヘッファーは、フィンケンヴァルデの牧師研修所の所長時代、研修生たちに毎朝、聖書のペリコーペをめぐって、三十分の黙想を課した。プロテスタント教会ではなじみの薄かったこの日課は、研修所では満座きとのきから黙想が始まる、と揶揄されたらしい。聖書のペリコーペをめぐる黙想は、霊性を豊かなものにしてくれる。私自身、ボンヘッファーの著作を読むために、その息づかいを忘れないよう、「道の光」と「ボンヘッファー 一日一章」を朝に読んでいた。もちろん、種々の制約のためにできない日もあるが、それはあまり気にしないことにしている。休んでも止めないことが肝要である。ビツァーは、「道の光」の序文で、次のように言う。「神学が聖書のギリシア語やヘブライ語の基本テキストから離れるほど、それだけ一層、真の神学の資料から離れることになる。聖書自体の世界へ入っていく訓練でもある」。

さてギリシア語による新約聖書通読の問題であるが、「道の光」は、新約文書がほぼ全部網羅されている。そのペリコーペから自らの黙想が引き出されると同時に、時にはその言葉の文脈を改めて読み直すこともある。ドイツ留学時代の恩師M・ヘンゲル先生は、このことの重要性を繰り返し強調されていた。統一された文体の日本語で通読するのは異なり、ギリシア語は、文書による文体の違いが大きい。同じ福音

書でも、アラム語の素朴な香りが残るマルコ、母語ゆえに複雑な構文を駆使するルカ、独特の文体のヨハネの差などがある。牧師は普通、講解説教や聖書研究などで、コンコルダンスを用いて他の文書を参考にすることはあっても、選んだ文書の箇所を集中的に釈義することになり、ギリシア語のテキストを読むのは、どうしても狭い範囲に限られてくるであろう。それはそれで大切なことであり、教会にとっても建徳的な意義がある。

語学に意欲的な人か、あるいはその賜物に恵まれた人でないと、いきなりギリシア語を通読するというのは、時間と根気が要求され、それなりに覚悟のいることである。しかし、日本語による聖書通読と同じく、ギリシア語を学んだ者にとつて、これが重要であることには変わりがない。外国語を読むとき面倒くささを感じさせられるのは、知らない単語が続くときである。「道の光」の規則的な読みは、基本単語に親しませてくれる。また断片的であれ、新約文書全体のギリシア語に目を通すことになる。それだけではなく、聖書の言葉の朽ちない宝が、黙想を引き出してくれるのである。読んだその日に、何かを引き出されたとき、年号を入れてメモを書き込む。二巻本であるので隔年になるが、毎年違うことが引き出されることに気づかされる。語学に堪能と言えない苦しさにある私自身、日ごろこのような訓練を続けるほかはない。その努力が通読を可能にしてくれた。

アシュラムと聖書



山下萬里
やましたばんり

日本基督教団東所沢教会牧師。アシュラムセンター常任委員、埼玉アシュラム委員長。このころの友全国連合会関東支部長。40年近く求道者の心の友としての働きに熱心に取り組む。

初めてお断りしておかなければならないことは、アシュラムは決して聖書通読を指すものではなく、毎日御言葉に聴き、黙想して祈ることを、日常の生活の中に位置づけようと図るものです。結果的には聖書を通読することになるのですが、ある期間を定めて、旧約聖書を通読するということにはしなないという意味です。しかし、聖書通読を否定するものではありません。キリスト教会には、古くから聖書を通読するという習慣がありました。このことはユダヤ教から受け継いだものです。ユダヤ人は、シナゴグにおいて律法（モーセ五書）を新年から読み始め、一年かかって読み終えます。読み終えた日をシムハット・トーラー（律法の喜びの

日）として喜び祝い、次の安息日、また創世記から読み始めます。

キリスト教会はこのことを、ユダヤ教の一日三回の祈りとともに取り入れ、その後祈りは朝夕二回の祈りとなりました。もともと最初のころは、新約聖書はまだ成立していませんでしたから、デイタケー（十二使徒の教訓）には、主の祈りを示して、「毎日三回、このように祈りなさい」とあるだけです。

ご存じのように、聖公会にはこれに基づく聖務日課（オフィス）の長い伝統があります。これは厳密な意味での聖書通読ではありませんが、毎日朝夕二回の祈りの時に旧約聖書、および詩編を振り当て、ほぼ二年で読み終えるように編成されており、これとは別に詩編は約二か月で読み終えるようになっていきます。私は友人の司祭に「牧会力を強めるためには、どうすればよいだろう」と尋ねると、彼は言下に「それはオフィス（聖務日課）を守ることだ」と答えました。

日本基督教団の聖書日課は、主日課として旧約を四年、新約を二年、計六年で読み終えるようになっていきます。

ところで、聖書は本来語られたものであり、従って私たちはそれを聴くのです。印刷術の発明によって、だれでも聖書を読むことができるようになりました。これはこれで喜ばしいことなのですが、反面私たちは聖書から聴くことを失ってしまいました。

読むことと聴くことは同じではありません。

読むことは私の主体的な行為です。私は聖書を聞いて読む。そしていやにならば閉じる。それですべては終わる。何事も起こらない。しかし、聴くという行為には、語る人がおらねばなりません。語り手は聴くことを求め、更に応答することを求めます。聴いて応答する時、ほんとうの出会いが起こり、言葉は出来事となります。

ルカ四章一六節以下に、主イエスがナザレの会堂でイザヤ書六一章一〜二節を朗読されたことが記されています。その時、主は「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言われたのですが、何事も起こりませんでした。聴いて応答する人がいなかったからです。

読まれた御言葉が、語られた御言葉として聴かれるために、黙想を必要とします。黙想とは、文字として読まれたものを、語られたものとして聴こうとする心の働きです。神の言葉は、理解し、感動することを求めません。聴従する人を求めています。神の言葉は私たちひとりひとりに、応答を求め、決断を迫ります。そこに祈りが生じます。その時私たちの生涯は、狂乱怒濤であろうと、平穏無事であろうと、感動に満ちたものとなります。そして新たに聴くことの恵みへと導かれます。

私は一人でも多くの方が、御言葉の恵みにあずかれることを願ってやみません。

聖書を書き写す



尾崎マスヨ
おざき

志村バプテスト教会（東京）会員。二児の育児のかたわら東京バプテスト神学校神学科、専攻科で学び、教会では訪問伝道担当事として奉仕する。

今から七年前のことでした。何だか手がだるいなと感じ、何か重い物でも持ったかしらと思いつたので、立つも、座るも右手を必要としていました。右手で何かにつかまっって立ち上がり、座るときは右手で体を支えないとこらんでしまっています。その右手が動かなくなりました。家族のための炊事・洗濯はもちろん、洗面、入浴等々、日常生活すべてに支障を来しました。まさか横になったらもう起き上げられません。

赤ん坊のとき思ったポリオの後遺症で、左手両足にマヒが残り、ほとんど動かせない状態だったので、立つも、座るも右手を必要としていました。右手で何かにつかまっって立ち上がり、座るときは右手で体を支えないとこらんでしまっています。その右手が動かなくなりました。家族のための炊事・洗濯はもちろん、洗面、入浴等々、日常生活すべてに支障を来しました。まさか横になったらもう起き上げられません。

四六時中寝たままであるわけにはいきませんが、何をしても家族の介助を必要としました。そんな状態が一月近くも続いたのです。本人である私はもちろん大変な思いで日々を送りましたが、家族も同様でした。幸いだったのは春休みであったので、当時まだ高校生だった娘が手伝ってくれたことでした。

またあの時のようになったらどうしよう、という不安が常につきまわっていましたが、右手が元どおりに使えるようになって、毎日酷使する、というよりせざるを得なくなりました。

この手が私にとってどんなに大切なものであるか、改めて知らされました。そしてこの右手が元気で働いているという証しを残しておきたいと思うようになりました。

だいたい前ですが、毎日静聴の時に「主の祈り」を書き写しておられる婦人からこんな話を聞きました。お題目のように唱えている時には得られなかった神の息吹が、一字一字書くことによって心の中にピンピン響いてくると言われたのです。

目だけあるいは声を出して読んでいては得られなかったものが、書くことによって得られるというのです。

その時、これだあとと思いました。これが聖書を書き写し始めたきっかけです。

幸い本業ではないが上手に製本をなさる兄弟が志村教会にいらっしやいました。お願いして製本はその方にお任せすることにしました。



最初の予定では十冊くらいに分冊し、三年間で仕上げるつもりでした。が、考えてみれば一日一章と目標をたてて通読することさえ困難な私にとって、毎日書き続けることは容易なことではありません。一日一章のつもりが、一日一ページになり、一節でも書ければいいという日もあるのです。そんな中で「創世記」が出来上がったときの喜びは筆舌では表せません。ルーゼリーフ片面にだけ写し書きました。見開きにしたとき片側のページが白紙になるようにしました。そしてこの白紙のページには何でも書き込めるようにしたのでした。その日の説教者のメッセージ、私自身の感想等々、自由にどんどん書いて、白紙のページが真っ黒になるのが夢です。

当初予定していた三年間はどうも過ぎてしまいました。指が途中で関節炎にかかり、ペンがもてなくなると、途中で中断したのでした。が、ここまでできたのだから何とか世界に一冊しかない私の聖書を完成させたいのです。My Bible workとして一日一節でもいいからと、今、続きを頑張っています。

エレミヤは「み言葉を与えられて、それを食べました」。私は「み言葉を与えられて、それを書いていきます」。そしてエレミヤと同じように「み言葉は、わたしに喜びとなり、心の楽しみとなりました」。

聖書通読のすすめ



小林和夫
こばやし かずお

日本ホーリネス教団東京聖書学院教会牧師。東京聖書学院院長。同教会での牧会は37年になる。長年同教団の指導者として、また現在では教育者として神学教育にも力を注ぐ。

私たちは、聖書を神の霊感による「神のことば」として受け取り、またそのようにクリスチヤンは聖書を読んでいます。たしかに聖書には、名言と言われるようなすばらしい文章や句があり、それに触れると驚きを感じたり、ほっとさせられたりすることがあります。

このようにまったく無前提で聖書を読むという読み方は、貴重なものということができます。そして、読むときに赤線を引いたり、印をつけたりして、有名な聖句や好きな聖句を読むということも、聖書の読み方の一つであると思います。しかし、聖書が啓示しているキリスト教の真理の全体像に触れようとするなら、どうしても聖書を通読するということが必要になってき

ます。

本質的に神のことばである聖書は、その内容から言うと「救いの歴史」という叙述形式で救いが記されています。まず神が天地を創造し、その冠として人間を造られました。しかし、造られた人間は罪を犯して、神との命の交わりにひびが入りました。神はその命の交わり、すなわち永遠の命を回復するためにアブラハム、ダビデを選び、預言者たちをお用いになって、御心を表されました。その頂点は、イエス・キリストの受肉と生涯、死と復活によって実現したと告げています。したがって、このキリストにつながる事柄によって、人は神との交わりを回復し、真の救いを経験することができるようになります。そして、教会のことや神の国が終末において完成されると告げられています。すなわち、旧約聖書はイスラエルを場とした救いの歴史であり、新約聖書は教会を場とした救いの歴史とすることが出来ます。

とが大切であろうと思います。しかし、次の段階においては、読んでいて難しかったり、わからなかったりすることが目につきます。その折には、信用できる簡単な注解書などを座右に置いて読まれるとよいと思います。この救いの歴史は単なる歴史の記述ではなく、この歴史そのものがイエス・キリストを指さすという「キリスト証言」という機能をもっています。そのことは、イエスが言うように、「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」(ヨハネ五・三九)とあるとおりです。私たちが真心を込めて聖書を通読をしていくときに、まさに「証しするもの」としての聖書を通じて、「証しされるもの」であるイエスが語ってくださるという事実に向面することが出来ます。ですから、この聖書こそ私たちの救いについて、信仰の生活について、余すことなく告げているクリスチャン生活の土俵(正典)であるということが出来るのです。

聖書を通読することによって、この大きな神の救いの歴史の中に自らを置くことができます。その大きな神の救いの計画の中に自分も入れられているという喜びと感動をもって聖書を読むときに、聖書のことばは、それぞれの句が生きて私たちに語りかけてきます。ですから、どうしても聖書に啓示されている歴史的真理の全体像(「あなたのみ言葉の全体は真理です」)口語訳・詩篇一九・一六〇)に触れるためには、聖書を通読することができないのです。通読については、最初は無前提で素読するこ



聖書通読が楽しくなるツール

さて、通読を始めたいとなったあなたに聖書通読のツールを紹介しよう。まず通読に必要なのは、何と云っても聖書。教会での聖書全巻(一巻)一冊に欠かさないのは大型講壇用聖書だ。総革装厚表紙で黒、赤、白、緑色がある。家庭集会などでは、小型講壇用聖書(ホームバイブル)が最適。総革装厚表紙の豪華版だ。個人の通読には、じっくり読める大型聖書がよい。いつでもどこでも通読したいという方には、携帯性抜群のハンディバイブルがお勧め。勉強熱心な方には、中型引取りつき聖書、和英対照聖書がある。今年六月には活字が大きく読みやすい、持ち運びに便利な分割聖書が発行予定だ。全巻通読をめざして、心機一転、聖書を新しくお買い求めになってはいかがでしょうか？

- 次は通読の助けになる日課表を紹介しよう。
- 聖書協会からは
 - 「聖書通読表(新共同訳・口語訳全巻通読用)」
 - 「聖読(こよひ)(年間市販のものでお勧め)」
 - 「日々の聖句(ローズンゲン)」
 - 「ヘテスタ奉仕女の家出版部)」
 - 「アパ・ルーム(アパ・ルーム日本委員会)などがある。
 - さらに「一日一章を日指す方には市販の人気のあるもの
 - 「み言葉はあなたの近くに」新共同訳聖書通読の手引(松田和憲著/新教出版)
 - 「信じつつ祈りつつ」ボンヘッフアー短章366日(小池創造

- 訳/新教出版社)
 - 「一日一生(新版)」内村鑑三著/教文館)
 - 「旧約聖書(一日一章)」新約編もあり(種本保郎著/主婦の友社)
 - 「聖と自由のことば(一日一章)」(加藤祐昭編/教文館)
 - 「聖句書道(一日一章)」聖句書道ゼンター)
 - 「日々の糧365日」主にお会いするまで(金田福一著/新生堂)
 - 「祈りの泉」の泉のほとり(シー・ヒギン編著/女子パウロ会)



最近、富田光雄著「御言葉はわたしの道(光)」(新教出版社一九九八年)を手にとり読んでみた。サブタイトルは「ローズンゲン物語」となっており、一気に読み易いボリュームであった。内容は前半がローズンゲンの紹介、後半が聖書との関わりを述べたエッセイ風目録、また著者の聖書理解を述べたもので、読むテンポも爽快だ。

「日々の聖句」という形で、その日の聖句日課とも書える。またその日の聖句が読む人にどういったパクトを与えるのか、短絡的聖書解釈にならないのが、そういう点を留意しつつ、旧約聖書と新約聖書の両者から聖句を選定するなど、ローズンゲンのいろいろな工夫についても教えられた。このローズンゲンが、多くの人々の忙しい生活の合間の中で神に対するひとときの瞑想と沈思の

Eメール

日々の聖句

渡部 信
日本聖書協会総主事

時を備え、その人の人生の中で垢のような味付けをしていく様子など、ヨーロッパのキリスト教伝統の中で、大変重宝がられてきたものであることが理解できた。これでは読者も実際に実行してみたい思いにかられる。

後半は著者の豊かな聖書研究と幅広い学識から引き出してきた文章で、例えば、キリスト教と笑いの問題では、すぐワルベルト・エー「この『露微の名前』を取り上げ



文字を読む

篠原せつ

エッセー

14

「たいらばやしか、

ひらりんか、

一八十のもうくもく

一つと八つと十つきつき。やーい」

この暗号のようなせりふは、昭和初期のころ、一応知られた小咄として、父からリズムよろしく耳にしたものである。

昭和三年、東北一円に流行したポリオに罹患した私は、その後遺症によって、運動能力の一切を犯されたかの状態となった。父母は、二才と一か月まで活発にはしゃぎ回っていた子の、一朝にして身動きのできなくなった体を、代わる代わるに抱きしめては、言葉もなく、目で問い合うばかりだったと聞かされた。ポリオのウイルスが脊髄の神経を犯したためとは知る由もないまま、ひたすらに血行を促すことに専念し、父母の日夜を次ぐマッサージに加えて、祖母の湯治と、訓盲学校の生徒さんたちの治療実習に用いていたお陰もあつてか、発育の止まったかに見える手足に力が入るようになったのは、学齢も間近いころだった。

父はある日、私をあぐらの中にボトンと落として、「なあせつう、お前についていろいろ考えたんだがな、その一つはいっぱい学問して、人様のお役に立つ人になるのはどうか。それにはまず字の読める人になりなさい。字はな、幾通りもの読み方があつて面白いんだぞ、いいか」と言うなり、手を二つ打ち、

「ああ、与太郎、与太郎はいるかい」

「へい、旦那さま」

「ちよいとそこまでお使いに行つとくれ。横町二つ先を曲がったところの平林さんにこれを届けてな、返事をもらつといで。平林さんだよ、表書きをよく見て。頼んだよ」

と語り出し、それに続いたのが冒頭の場面。道順も名字もケロリと忘れた与太郎が、表書きの文字を細かく読み分けて、呼び声よろしく「どこかいなあ」と捜す姿を通して、何を思ったかは記憶にさだかではないが、「文字」に興味を持つ始まりになったには違いない。父はまた「もう一つ面白いのは、字」はな、じーっと見つめていると意味を語り出すんだ」と言い、尋ねると必ず「よく見つめてから聞きなさい」と、すぐには教えてくれなかった。

私が日曜学校に導かれたのは小学校三年生であつたが、あのころはまだ子どもの読める聖書は、どこからも刊行を見なかつたように思われる。手にしたのは、いきなり大人用文語体聖書であつたが、六年生のころには、付けられた仮名をたどりながら、漢字ばかりの聖書に読み入っていた覚えがある。「文字を読む」妙技と妙味を身につけてくれた父の存在があればこそであつた。

文字を読む面白さに、書く楽しさを加えるため、手に力をつけてくれたのは母だった。お琴を弾くことで右手の三本指に力が入り、左手も余韻音を奏するための糸を押す業で、日に日に強められた。また和洋裁の手仕事や、母の股とミシンの足踏みをリハビリ器具として用いたお陰と、宣教師によるあぜ道伝道で、足もともどもに鍛えられ、み言葉を運ぶ足として用いられたく献身したのは二十三歳であつた。

現代は目を追つて活字離れというより、文字そのものから遠ざかつているように思われる。取度の鋭い中高生時代に、文字を深く読み、語彙を豊かに蓄えていけば、自分の気持の表現がスムーズに行われ、「切れる」という苦しい心の状態が幾分かでも和むのではなからうか。中高生に限らず、胸を刺されるようなニュースを耳にする度に、「今からでもいい、意味深い文字で綴られた書物を目にしてほしい」と切に望むのは、旧約聖書の中の「詩編」である。その一語、一語は人生を一変させずにはおかない。

特に二三編を読むなら、この後「神の恵みと慈しみがいつもわたしを追いかけてくる」人生が展開される。



篠原せつ (しのはら せつ)

1926年生まれ。

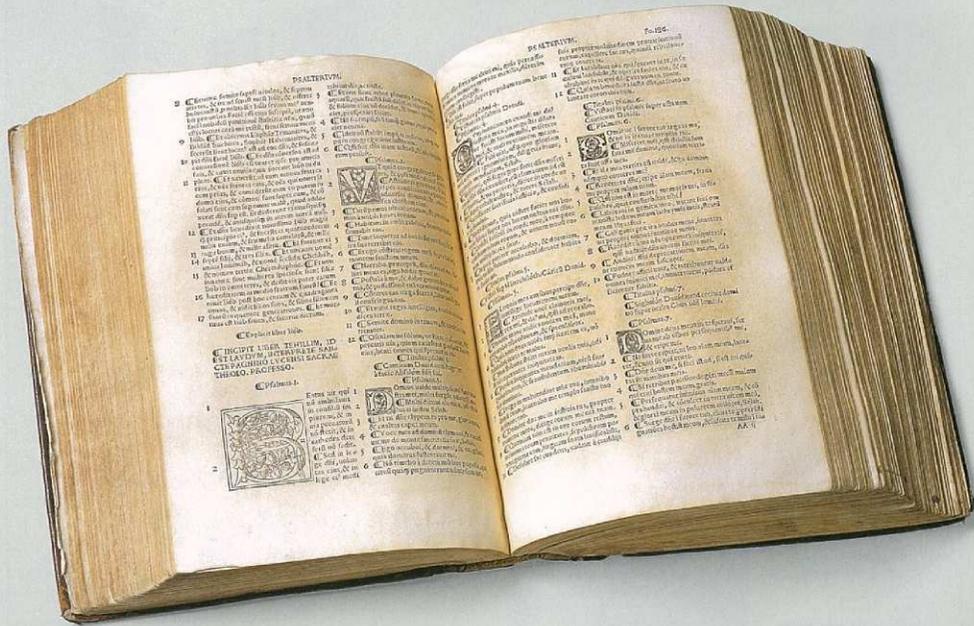
日本キリスト教伝道会エバンゼリスト。

身体障害者キリスト教伝道協力会副会長。

日本聖書協会理事。

パグニヌス訳 ラテン語聖書

リヨン 1528年刊
縦:25cm 横:18cm



ラテン語聖書は、カトリック教会の聖書として用いられたヒエロニムス訳の「ウルガタ訳」が有名である(405年刊)。ウルガタ訳以後1000年以上を経て、新しい翻訳が、イタリア人のドミニコ会士パグニヌスによって初めてなされた。ヘブライ語、ギリシア語原典から20年以上の歳月をかけて翻訳され、1528年に刊行された。これは、カトリックとプロテスタント両方の学者に用いられた。この聖書は、今日のものとは異なるが、節数字が付けられた最初のものである。聖書図書館の蔵書の中で最も古い書物である。

2000年を迎えて

岡田武夫 カトリック中央協議会事務局長

カトリック教会では、紀元二〇〇〇年を旧約のヨベルの年にちなむ「大聖年」と定め、盛大に祝うことになっています。そこで紀元二〇〇〇年を迎えるに際し、「聖書」がいかに重要であるかをあらためて学ぶことは、カトリック信者にとつてもきわめて肝要なことであると考えます。

カトリック教会では、第二ヴァチカン公会議以前は、確かに聖書の学習がおろそかにされていたと思います。聖書は一部の専門家のものであるという意識が強かったのは事実です。しかし今は、そのようなことは完全に過去のこととなりました。今では多くのカトリック信者が熱心に聖書を学んでいます。各地で聖書研究会が開催されています。聖書を通読することを目指すグループもあります。マルセル・ルドールズ神父の指導する「聖書10週間」の運動はきわめて盛んです。アジア司教協議会連盟のレベルでも、生活に即して聖書を読む、という聖書使徒職の運動が熱心に呼びかけられています。先日も韓国のチュンチョン教区のジョン・チャン・イック司教が来日され、アジア・レベル開催予定の聖書使徒職研

修会への参加を熱心に呼びかけました。「聖書を読む」というとき、私は二つの視点を想起します。まず「生活から」という視点です。換言すれば、この世界の現実のなかで、神の言葉、イエスの言葉は、わたしたちに何を語っているのか、というアプローチの仕方です。もう一つの視点は、「典礼から」ということです。わたしたちは、聖書は典礼と不可分であると考えています。聖書の朗読とその解説は典礼の不可欠の構成要素となっています。聖書は必ず典礼の祭儀のなかで読まれます。その際、典礼暦年の考え方にしたがって、適切な箇所が選ばれるように配慮されます。

あるカトリック信者のご夫婦の話です。夫は仕事で忙しく、ろくに聖書も読む余裕もない日が続いたそうです。そこで妻は毎朝、夫が食事をする間、聖書の朗読をし続けました。その期間、実に二十年！いつしか彼の心のなかに「みことば」がしみこんでいきました。紀元二〇〇〇年を迎えるに際し、皆さんも聖書を学ぶことについて、何か具体的な決心をしてみたいかがでしょうか。

Bible Reading in Catholic Church / Okada Takeo, General Secretary Catholic Bishops' conf. of Japan

編集後記

2000年という節目の年を迎えようとしています。日常の生活からと離れて、歴史の中に生きていくことを意識します。この節目の年に、何かをしようとする方も多いのではないのでしょうか。あらためて聖書を通読することを語りたい。この機会をどう活かしましょうか。

4月の発刊の交代に当たって、ソアのチームも新しくなりました。次号から紙面の刷新も予定しています。(ご期待ください。)

●お知らせ

- お申し込み
- 2000年用聖書
- テイル・ソアに熱れることばが「ソア」
- 日誌：6月9日(水)14日(日)6日(日)
- 会場：千葉寺(8)随時特設会場
- 1999年用聖書
- テイル・ソアに熱れることばが「ソア」
- 日誌：8月26日(水)30日(日)5日(日)
- 会場：博多大丸店(8)随時特設会場
- 1255年(近畿)講演会
- 講師：岡田光雄氏(東北大学名誉教授)
- 日時：9月26日(日)午後3時(予定)
- 会場：日本キリスト教団天満教会
- 会費：1,000円(予定)

◆ソアは、全国のための情報誌です。継続してお読みになりたい方は、後援会・維持会にご加入下さい。

●ソア 第14号 JUNE 1999
〒104-0061
〒104-0061
東京都中央区銀座4-5-1
電話：03-3567-1980
FAX:03-3567-4436
ホームページ: http://www.bible.or.jp
TEL:03-3567-18410
表紙イラストレーション：本田年一
デザイン：株式会社サン・コン
印刷：文芸春秋印刷株式会社